

## 〔Ⅷ〕 現下中等教育の課題

### — 人間的教育の創造 —

田 浦 武 雄

(昭和46年4月～同49年3月学校長在任)

#### 問題の所在

こんにち、高等学校には、当該年齢層の93%が進学するようになり、大衆化がすすんできた。その場合当然おこってくるのは、学習の動機づけの問題である。なんのための中等教育か、中等教育の改善のためにはどうしたらよいか、など一連の問題がだされてくる。これらの問題の記述と処方について簡潔に述べたい。

#### 学校の役割

学校は、その役割論からみると、これまで青少年の認知的・態度的志向を方向づけるのに用いられてきた。この場合、固定した伝統的文化の枠組に強調がおかれすぎると、学校の役割は社会順応的なものに偏りすぎ、文化改造の力を弱めることになる。中等学校の場合も、このことが言える。

日本の学校の現実をみると、受験競争の激化、学校教育についていけない子どもの増加、学習塾の氾濫など、多くの問題があらわれている。とくに大学入学試験が、高校や中学での学習に大きな枠をはめている。文部省の学習指導要領の枠と合せて、二重の枠組が、中等学校の教育を方向づけている。私は53年の3月に、名大教育学部附属中・高校の、中学1年から高校2年までの全員について、意識調査をおこなったが、その調査結果から注目すべきものを拾ってみると、大学入試のインパクトの大きさがわかる。(1)学習塾等に行っているものが、全体で34.2%あり、その理由の第1に、「大学入試に備えて」があげられている。中学生は39.8%、高校生は29.3%で、中学校に比べると高校生の方が、学習塾等に行く者の割合はすくない。しかし補習教育を行っている他の高校と比べると、はるかに高い数字を示している。いずれにしても、こんにち多くの中学生・高校生は、学習塾や補習教育などによって、通常の学校教育以外に学習を補うことによって、大学入試に備えている。

(2)現在悩みをもっていると答えたものは、全体で64.2%あるが、悩んでいることとして、「受験」が高校2年の場合に、急上昇している。(3)学年が進むにつれて学校の進学指導に不満を示すものが上昇し、高校

2年で56%になっている。受験エリート校化せず、しかも新設県立高校にみられる徹底した補習教育をしていない附属学校の場合、この不満の数字は予想されるが、生徒の間にみられる受験志向の強さを示している。

他方、1976年秋から77年夏にかけて、私の知友島原宣男ラトガーズ大学準教授と一緒にやった愛知県下の公立高校の教育人類学的調査では、「大学入試制度と文化的志向」をテーマにしておこなったが、予想以上に特定大学への進学率をもって、学校評価の尺度にしていることが明らかとなった。愛知県では1973年度から普通高校の学校群制度を実施し、これにより、大学区制時代に固定化した特定校を頂点にしたハイアラーキは崩れたが、学校群のハイアラーキが新しく生じてきた。この主な原因は、中学校側の生徒振分け政策にある。この場合のよりどころとなっているのは、業者のおこなう統一テストと学校内の実力テストと九教科の総合点である。そのために、受験競争は日常化して、中学生の学習を方向づけている。また高校から大学への入試は、生徒たちの間に教科のハイアラーキを意識的に無意識的にきめさせている。

新設高校には、概して中学校の30%～40%の学力層の生徒がわりあてられてきた。このような振分け政策を改めさせ、中学校側からもっと質の高い生徒を送りこんでもらうためにも、大学入試でよい成績をあげることが意図されている。そのためにも補習教育を強化している。正規の授業でも、概してハード・トレーニングが行われているが、学習のきめでは自主的な学習意欲と学習法であるから、この面の育成の工夫もこらされている。しかし高校教育の問題は、受験技術に枠づけられた知識学習の力が、人間の学力と同一視されていることである。近年知識偏重を批判し、人間性豊かな教育を志向する声が強くなってきたが、私も、力をこめて人間的教育の創造を主張したい。

#### 人間的教育の創造を

教育の人間化を、まとまった形で提案したのは、1971年の全米教育協会（NEA）の報告書『70年代およびそれ以後の学校』である。NEAの報告書が示したアメリカ教育の診断と処方は、日本の教育を考える

場合にも参考になるところが多い。この報告書は、60年代の教育のゆきずまりと欠陥とに対する反省にたち、70年代以後の教育のあり方を示唆している。それによれば、60年代の教育は、科学・技術上の人的需要の供給という点では大きな成功をおさめたが、学業成績では示されにくい道徳性を犠牲にしてきた。学校でよい成績をおさめた人々も、専門的技術をもっているだけであって、それを人間の連帯性と結びつけていなかった。それではこれまでの教育は、どのように克服されるべきか。同報告書は、次のような処方方をうちだした。学校は、子どもたちを社会の諸機能に対して準備するという従来の役割を超えて進まねばならないとし、次の点を強調した。①これからの学校は人間中心でなければならない。②人間中心というのは全面的に実現された人間をめざすことであり、知的発達だけでなく、身体的、美的、情緒的、社会的、道徳的発達を重視する。③人間中心の教育は、社会に順応するだけでなく、よりよい社会の形成に貢献する人間をめざす。すなわち教育の人間化、人間的教育の確立が主張されている。

それなら、どのようなカリキュラムを考えたらよいか。この点については、この報告書の予備資料を書いたコロンビア大学のA・W・フォシェイ教授は、60年代の教育は、社会の経済的発展という資本の要求によって支配され、学校は人的能力の選別機関となり、社会階層の差を激化させることによって、重大な問題をはらむことになったと批判し、学校は一部のエリートに傾斜した教育ではなく、すべての子どもがもっている潜在的な優秀性を掘りおこすような自己達成を中心とする教育が重視されるべきであることを強調している。そのためのカリキュラムとして、在来の教科カリキュラムと並んで、集団過程や人間関係を学習する社会的発達をめざしたカリキュラムと、自己覚醒のカリキュラムとの三本立を主張した。この構想は、人間的教育の確立のための方策として、注目すべきものがある。60年代の教育に大きな影響を与えたJ. S. ブルーナー（現在オックスフォード大学心理学教授）も、1971年の『教育の適切性』で、科学主義的教育への偏りを批判し、二本立カリキュラムを提唱しているが、フォシェイの主張と類似している点が多い。ブルーナーの場合、個の重要性とそれを可能にする社会の実現、カリキュラムの多様な実験を重視している点も興味をひく主張である。

われわれは、今や70年代の終りから80年代に向かおうとしている。NEAの報告書が指摘したアメリカの学校教育の現実の分析とその改善の処方とは、これからの日本の教育の改善にも参考になることが多い。とくに人間中心の教育、教育の人間化を重視している点は、きわめて示唆にとんでいる。私も、日本の学校教

育の諸欠陥とくに知識主義への偏重を克服していくために、人間的教育の確立を主張したい。そこで日本の中等教育に焦点をあてて、人間的教育の確立を考えてみる必要がある。

私のいう人間的教育は、民主的価値観、確かな知識、豊かな感情、不屈の意志、逞しい健康、優れた道徳的実践力、創造的態度などの総合的育成をめざしている。民主的価値観は、NEAの報告書には明確でなかった要素である。それは、人間の自己実現と人類の福祉への献身を、重要な核としている。この価値観を強調するのは、次の三つの理由があるからである。第一は教育の論理の観点からである。教育過程は、教育的価値—内容・方法の動態として成立し、優れた内容・方法も、望ましい価値によって方向づけられなければならない。その効果をあげることはできない。これまでの中等教育では、教育的価値が安易に考えられ、教育技術主義に陥り、人間不在の教育に傾いてきた。第二は、日本の戦前の全体主義的価値観を超克する必要があるからである。そこでは家と国とが強調されすぎ、個としての人間の教育が軽視されてきた。これからの教育では、個としての人間の教育の他、今や世界史の課題となった人類の福祉の観点にたつ教育も忘れられてはならない。第三は、60年代の生活原理からの転換をする必要からである。60年代の教育は、経済優先の原理に支配された観があるが、この弊害を打破する意味でも、経済優先の原理から、人間の福祉、人類共存の原理への転換が必要となってきた。

民主的価値の教育は、現実の受験競争の場では、行にくいことは確かである。とくに大学入試に方向づけられている中等教育の場合、その困難さは予測できる。しかし何のための教育かをこのさい考えてみる必要がある。教師は、生徒がめざす入試に合格させる力を育てるだけにとどまらず、生徒たちの人格教育に責任をもちこれを果さなければならない。価値の教育にあたってはもちろん、生徒の発達段階が考慮され、価値の注入ではなく、比較研究が奨励されなければならない。私どもが行った47年から52年にかけての6年間にわたる価値意識の調査では、附属学校の生徒は、伝統的志向や革新的志向より中庸的志向をもっているものが多いが、この時期は、価値観の動揺や変化をおこす時期であり、その指導のしかたの研究が重要である。

民主的価値観の他、前に掲げた6つの要素は、ともに均衡のとれた統合が必要である。応用力のきく確かな知識はますます必要なものであり、意志、感情、健康も、その育成が不可欠である。私も校長時代、講話の時間をとおして、この点を意識的に強調した。また道徳的実践力を育てることも、これからの中等教育で注目すべきである。いわゆるエコノミックアニマルに

